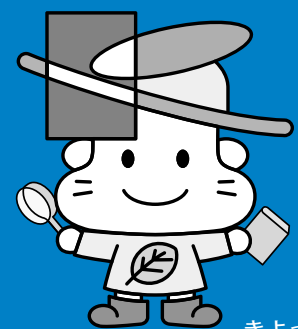


きよたの昔ばなし



入植から百数十年。さまざまなお出来事があり、地域の人々が清田の歴史を築いてきました。今月は、そんな清田ならではの「昔ばなし」をご紹介します。



きよっち

清田区の中心部は、かつて「あしりべつ」と呼ばれていました。

明治6年に月寒開拓団の一員であった長岡重治氏が最初の入植者といわれています。明治30年代に稲作と畑作が定着し、集落ができました。

当時この地域は、^{※1}厚別、^{※2}三里塚、^{※3}公有地と呼ばれていました。「清田」という地名は、美しい清らかな水田地帯という意味で昭和19年に名付けられました。昭和30年代に団地造成が始まり、のどかな田園地帯は市街地へと姿を変えていきました。

この清田の開拓時代の暮らしや苦勞話を後世に伝えようと、「昔話座談会」を開催。古くから清田に住む方に「きよたの昔ばなし」を語っていただきました。

現在地（※1清田・北野・平岡・真栄、※2里塚、※3有明）

アシリベツ川

アシリベツ川は、「清田の母なる川」といわれています。かけがえのない生活用水を得ると



▲稲作の様子

ともに、水質の良さからおいしい米を収穫することができました。また、時には木材の運搬にも利用しました。

しかし、大きく蛇行していたため、はんらんの多い川でもありました。降雨量が100ミリを超えると水害が起き、そのたびに地域の消防団が出動していました。

そこで、地域住民が改修に向けた期成会を結成。何年もかけて予算を確保し、川の大改修を行いました。この改修がなければ、川下の開発はできなかったであろうといわれています。



▲水害の様子

また、川の砂利は砕けやすい軟石系で、「ビスケット砂利」「煎餅砂利」などと呼ばれていました。道路整備の際に敷き詰めたり、家を建てる基礎に使ったりと大変重宝しました。